報告 REPORT

令和８年度
北海道医師会賞・北海道知事賞 受賞者業績紹介

本誌９月（第1296）号にてご報告いたしましたとおり、10月３日（土）午後３時より、札幌グランドホテルにおいて、北海道医師会賞・北海道知事賞贈呈式を挙行いたします。

ここに受賞された方々のご業績を紹介いたしますとともに、受賞者各位の一層のご活躍を祈念いたします。

－学術部－

令和８年度　北海道医師会賞・北海道知事賞受賞者

医師会名	職　氏　名	研究（業績）題名
札　幌　市	医療法人札幌麻生脳神経外科病院 院長　飛驒（ひだ）　一利（かずとし）	脊椎・脊髄疾患とりわけ脊髄空洞症、脊髄腫瘍等に関する臨床研究
北海道大学	北海道大学大学院医学研究院 産婦人科学教室 教授　渡利（わたり）　英道（ひでみち）	婦人科がんに対する新規治療の開発と標準治療確立を目指した研究
	北海道大学大学院保健科学研究院 運動器・スポーツ科学分野 特任教授　遠山（とおやま）　晴一（はるかず）	障害発生予防に向けたスポーツ整形外科・運動器リハビリテーション領域における研究および社会活動
札幌医科大学	札幌医科大学医学部 内科学講座消化器内科学分野 教授　仲瀬（なかせ）　裕志（ひろし）	炎症性腸疾患の病態解明と新規治療開発に関する基礎・臨床研究
	札幌医科大学医学部 小児科学講座 教授　津川（つがわ）　毅（たけし）	ロタウイルス胃腸炎、ワクチンなど小児感染症領域における貢献
旭川医科大学	旭川医科大学病院 腫瘍センター長･病院教授　田邊（たなべ）　裕貴（ひろき）	がんゲノム医療の臨床的意義に関する研究
	旭川医科大学 内科学講座循環器･腎臓内科学分野 教授　中川（なかがわ）　直樹（なおき）	慢性腎臓病の克服に資する基礎的および臨床的研究

北海道医師会賞・北海道知事賞

脊椎・脊髄疾患とりわけ脊髄空洞症、脊髄腫瘍等に関する臨床研究

医療法人札幌麻生脳神経外科病院

院長 飛驒（ひだ） 一利（かずとし）

飛驒一利先生は、脳神経外科医として一貫して脊椎・脊髄外科診療に従事し、脊髄空洞症、脊髄腫瘍、脊髄血管障害の研究と診療において国内外を牽引してきた。脊髄空洞症では、病態形成の機序の解明と外科治療の確立に大きく貢献し、脊髄腫瘍、脊髄血管障害に対しては、神経機能温存を重視した新たな手術手技を開発するなど、脊髄外科の発展に顕著な業績を挙げてきた。これらの研究成果は国内外で高く評価され、多くの患者の予後改善に寄与している。

診療面では、脊髄空洞症や脊髄腫瘍の高度専門医療を実践し、全国各地から患者紹介を受ける我が国屈指の脊髄外科医として活躍している。また、頚椎症や腰部脊柱管狭窄症などの変性疾患に対しても、安全性と低侵襲性を追求した手術方法や手術機器を開発し、その成果は全国の医療機関で広く活用されている。

さらに、日本脊髄外科学会理事長、日本脊髄障害医学会会長を歴任し、脊椎脊髄外科専門医制度の創設・運営において脳神経外科領域を代表して中心的役割を担ってきた。北海道大学および札幌麻生脳神経外科病院では数多くの優れた脊椎・脊髄外科医を育成し、北海道のみならず日本の脊椎・脊髄外科の発展に多大な貢献を果たしている。

婦人科がんに対する新規治療の開発と標準治療確立を目指した研究

北海道大学大学院医学研究院産婦人科学教室

教授 渡利（わたり） 英道（ひでみち）

渡利英道教授は、1989年に北海道大学医学部を卒業後、母校の産婦人科学教室に入局し、1995年に医学博士号を取得。関連施設での医長経験の後、1996年より３年半、米国ペンシルベニア大学に留学。帰国後、2001年より北海道大学病院婦人科に勤務し、2018年に教授に就任して以降、現在まで一貫して婦人科がんの臨床、教育、研究に従事してきた。特に、婦人科がんの臨床試験を通じて標準治療の確立ならびに新規治療法の開発を目指し、①子宮体癌手術における標準的リンパ節郭清確立のための臨床試験（JCOG1412）、②再発・難治性婦人科稀少がんを対象としたPARP阻害薬の安全性・有効性を評価する医師主導治験（JGOG2052）、③局所進行・再発外陰癌・腟癌・子宮頸癌に対するASP-1929を用いた光免疫療法の安全性・有効性を評価する医師主導治験（HICARi study）を主任研究者として実施している。

現在は、日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）の婦人科腫瘍グループ代表ならびにSCRUM-Japanプロジェクトの婦人科臓器グループ代表として日本における婦人科がんの臨床研究の推進に尽力している。学会活動としては、婦人科がんに関連する主要な学会の理事を務めていることに加え、最近はアジア婦人科腫瘍学会（ASGO）のPresident-Electに選出され、2028年より理事長を務める予定となっていることから、国内・国外でのさらなる活躍が期待されている。

障害発生予防に向けたスポーツ整形外科・運動器リハビリテーション領域における研究および社会活動

北海道大学大学院保健科学研究院運動器･スポーツ科学分野

特任教授 遠山晴一（とおやまはるかず）

遠山晴一特任教授は、1985年に北海道大学医学部を卒業後、整形外科に入局。1991年から米国Vermont大学、1993年から米国Columbia大学に留学し、帰国後は2001年に北海道大学医学研究科助教授、2007年に大学病院准教授、2013年に保健科学研究院教授に就任し、2019年から北海道大学スポーツトレーニングセンター長、2022年から大学病院産業医を兼務した。この間、障害発生予防を目指したスポーツ整形外科・運動器リハビリテーション領域の研究に従事し、2026年度より現職となる。

遠山特任教授は、2008年にアジア・オセアニア圏で初めてACL Study Group traveling scientistに選出され、2021年には国際関節鏡・膝関節・整形外科スポーツ医学会（ISAKOS）よりアジア地域初となるAchilles Orthopaedic Sports Medicine Research Awardを受賞するなど、国際的に高く評価されている。

国内では日本整形外科学会ACL損傷診療ガイドライン策定委員会委員長を務め、エビデンス構築に貢献。本道においては2002年より毎年、北海道選手団本部役員として国民体育大会（現・国民スポーツ大会）に帯同し、北海道スポーツ協会スポーツ科学委員会副委員長として道内アスリートの競技力向上を支えるとともに、2019年からは北海道国民健康保険診療報酬審査委員として地域医療の安定にも尽力している。

炎症性腸疾患の病態解明と新規治療開発に関する基礎・臨床研究

札幌医科大学医学部内科学講座消化器内科学分野

教授 仲瀬裕志（なかせひろし）

仲瀬裕志教授は、京都大学医学部消化器内科、米国ノースキャロライナ大学消化器病センター等で研鑽を積み、現在、札幌医科大学医学部内科学講座消化器内科学分野教授、医学部長・医学研究科長を務めている。炎症性腸疾患（IBD）を一貫した研究テーマとし、日常診療で生じる臨床的疑問を起点に、病態解明、診断法の確立、治療開発へと展開する基礎・臨床融合研究を推進してきた。特に、従来のIBDの枠組みでは説明困難な腸管炎症に着目し、家族性地中海熱関連遺伝子（*MEFV*遺伝子）との関連を明らかにするとともに、コルヒチンが有効な患者群の存在を世界に先駆けて示し、*MEFV*遺伝子関連腸炎という新たな疾患概念の確立に貢献した。この成果は、診断に難渋してきた難治性腸炎に新たな病態理解と治療選択肢をもたらし、遺伝的背景に基づく個別化医療への道を拓くものである。さらに、潰瘍性大腸炎の粘膜炎症を客観的・自動的に評価するRed Density Systemの開発を主導し、医師の経験に依存しがちな内視鏡評価の標準化にも貢献した。また、IBD新規治療薬の国際共同治験に多数参画し、世界的な治療エビデンスの構築にも寄与している。基礎研究においても腸管炎症の分子機序を幅広く解析し、基礎研究の成果を臨床へ還元するトランスレーショナルリサーチを継続してきた。現在は日本炎症性腸疾患学会理事長として、わが国のIBD診療・研究体制の発展と次世代育成を牽引している。

ロタウイルス胃腸炎、ワクチンなど小児感染症領域における貢献

札幌医科大学医学部小児科学講座

教授　津川（つがわ）　毅（たけし）

津川毅教授は、1998年に札幌医科大学医学部を卒業後、同大学小児科学講座に入局し、小児科領域の診療・研究・教育に従事してきた。札幌医科大学大学院ではノロウイルスの研究、2007年からのアメリカ国立衛生研究所（NIH/NIAID）への留学では、細胞培養やマウスの継代によるロタウイルスワクチン弱毒化のメカニズムに迫るなど、胃腸炎ウイルスを主な研究テーマとしている。関連施設との疫学研究では、ロタウイルスワクチン接種率の上昇とともにロタ入院数が減少したこと、2020年のCOVID-19流行やロタウイルスワクチン定期接種化後のロタ入院数の激減、2025年のロタ再流行などを報告した。

ロタウイルスにおいては国内のオピニオンリーダーであり、厚生労働省「ロタウイルスワクチン作業班」では唯一の臨床小児科医として参画し、ロタワクチン定期接種化の必要性と課題について報告した。また、AMED研究班「腸重積症サーベイランス」や、日本小児科学会の委員会活動を通して、2020年10月のロタウイルスワクチン定期接種化に中心的な役割を担った。その他、厚生労働省の「新型コロナウイルス感染症診療の手引き」の執筆協力者、日本小児感染症学会「小児消化管感染症診療ガイドライン2024」の委員長として情報発信も行ってきた。

2021年９月の現職就任後は、北海道の小児医療を支えるとともに、現在、治験センター長、カリキュラム委員長として、同大学・附属病院の臨床・研究・教育活動に深く関与している。

がんゲノム医療の臨床的意義に関する研究

旭川医科大学病院

腫瘍センター長・病院教授　田邊（たなべ）　裕貴（ひろき）

田邊裕貴先生は、1994年に旭川医科大学医学部を卒業後、同第３内科に入局し消化器内科学の研究に従事し、1998年に学位を取得し、2000年から米国カリフォルニア大学アーバイン校病理学講座に留学し消化管の自然免疫と抗菌ペプチドの研究を行った。厚生労働省の医系技官として様々な先進的な臨床研究の推進に貢献し、国際医療福祉大学病院での消化器内科分野の臨床研究を実践し、2018年からは旭川医科大学に戻り、現在は腫瘍センター長に就任している。

田邊先生は、消化管自然免疫ペプチドの精製とリコンビナントペプチドの作成の技術を応用して多数の論文を報告し、腸管免疫学の発展に貢献した。次世代シークエンサーの開発に代表される遺伝子解析技術を応用して、消化器癌の発癌早期の遺伝子変異を同定した。それらの遺伝子解析の技術は、遺伝性腫瘍とがんゲノム医療の分野で臨床応用され、がん遺伝子パネル検査が保険収載された。免疫チェックポイント阻害剤が多くの癌腫の標準治療となるとともに、遺伝子変異の多いマイクロサテライト不安定性のがんには劇的な効果が認められるが、その遺伝子変化が消化管癌の発癌初期から認められていることなど、臨床検体を用いて詳細に検討した。時代の波に乗るように、旭川医科大学病院のがん遺伝子診療部を立ち上げ、現在は北海道内のがんゲノム医療の普及に貢献している。基礎研究で培った技術が広く臨床応用され、北海道内の患者に還元するがんゲノム医療の発展に貢献している。

慢性腎臓病の克服に資する基礎的および臨床的研究

旭川医科大学内科学講座循環器・腎臓内科学分野

教授 中川直樹（なかがわなおき）

中川直樹教授は、1997年に自治医科大学を卒業後、旭川医科大学内科学第一講座（現内科学講座循環器・腎臓内科学分野／呼吸器・脳神経内科学分野）に入局し、北海道の地域医療に従事してきた。2002年からは、旭川医科大学薬理学講座でプロスタグランジン受容体ノックアウトマウスを用いた腎線維化機序の研究を行い、2012年からは、米国ワシントン大学（シアトル）腎臓内科へ留学し、遺伝子改変モデルを用いた腎臓の発生および線維化進展における研究に従事した。2014年に帰国後、循環器疾患・腎疾患に関する診療・研究・教育に従事し、2024年、旭川医科大学内科学講座循環器・腎臓内科学分野の教授に就任した。

慢性腎臓病の共通経路である腎線維化進展におけるマイクロRNAの役割解明に関する基礎研究に従事する一方、循環器・腎臓・脳神経内科の領域横断的な臨床研究として、希少遺伝性疾患であるファブリー病のハイリスクスクリーニングを北海道全域で行い、北海道のファブリー病診療の発展に大きく寄与している。また、様々な厚生労働省の班会議・腎疾患政策事業に参加し、難病では一次性ネフローゼ症候群と一次性膜性増殖性糸球体腎炎（C３腎症を含む）を担当し、慢性腎臓病患者の治療と就業の両立支援の研究班では代表を務めた。さらに慢性腎臓病に関する多くの臨床疫学研究、多職種連携体制の構築を推進し、学部教育や大学院教育にも取り組み、次世代を担う人材の育成にも尽力している。

電子メールによる会員への情報提供について
－メールアドレスの登録－

◇情報広報部◇

本会では、インターネットを利用し、電子メールにより緊急性の高い情報を、会員の皆様に送信提供しております。対象は当会の電子メールアドレス利用者全員と他プロバイダの電子メールアドレスをお持ちになっていて、本会にアドレスを登録している会員です。

他プロバイダの電子メールアドレスの登録につきましては、随時受け付けておりますので、是非ご登録いただきたくご案内いたします。

●電子メールアドレスの登録方法

電子メールで、ご氏名、登録メールアドレスを明記のうえ、下記宛お送りください。

・申込先メールアドレス：**add@m.doui.jp**